

越案用紙

發送番號

本部

廢秘第四

一

號

二

發送月日

明治

年

九月

十日

日

前後

時

分

總長

次長

部長

部員

主任



宛名

陸軍大臣

發送者

總長

送乙第三〇五二號
式銃用彈藥筒
更正、作、付、申、認、海、越、中、等、年
里、存、世、之、し、美、榮、及、回、答、多、也
進、行、試、用、及、返、收、

參謀本部

0494

字

建第4の辨

陸軍省 参考第36の辨

明治四十年七月十日

陸軍技術審査部長 有坂成章

陸軍大臣 青木正毅 殿

三十年九月以來本部に於て研究實施驗シタル新式小銃彈其成績別試採用理由書、通リ彈道諸性能現制三十年式小銃彈に比シ著シク優秀なる有之候、自四十年式(四〇式)略稱(銃彈)部各に制定相成度而シテ此小銃彈、步兵銃に在テハ照尺ヲ騎兵銃に在テハ照尺及照星ヲ改正セバ三十年式及三八式小銃に直ニ使用適合なる有之候間目下新製中、三八式小銃ヨリ迄、四〇式銃

0496

彈ノ照尺及照星、改正相成、度制式圖同、首解
及三八式小銃照尺及照星改正圖相添、此段
及建議准也

追テ三十年式小銃ハ三八式小銃ハ交換ノ時期
ニ於テ本文同様照尺及照星ノ改正相成、俾
様致度、将々四〇式銃彈用、照尺、ニ現制
三十年式銃彈ヲ添射スル場合ノ顧慮、
射距離對照表添付准也

區
官

0497

添存書類目録

一新式銃彈採用建議、理由

一四〇式銃彈制式圖

一四〇式銃彈制式圖、解

一三八式歩兵銃照片、改正圖

一三八式騎銃照片及照星坐落改正圖

一四〇式銃彈、三〇年式銃彈、照片距離比較

陸

軍

0498

新式銃彈採用建議ノ理由

軍用小銃威力ノ大小ハ其彈道性能ノ優劣ニ基
固スルモノニシテ威力ハ其伸セル彈道ト強盛ナル活カトシ
以テ到達スル彈丸ハ乃チ大ナル威力ヲ有スルナリ然要則
ヲ得セシメレバ彈丸ノ達率ト重量トノ増加ヲ要スヘシ然
レトモ達率ト重量トノ増加ハ直ニ銃ノ反撞力ヲ増大
スルニヨリ是亦大ニ考慮ヲ要スヘキモノトス而シテ其反撞
力ノ増大ハ銃ノ採用ヲ渋滞セシメ從テ反撞射ノ達率及
減シ命中ノ精度ヲ害スルヲ以テ勉メテ減殺ヲ圖ルヘキ
モノトス(連發銃ノ採用ハ一層其必要ヲ感セシメタリ)少口
徑銃ノ創意ノ實ニ此ニ胚胎シ之ニ因テ反撞力ヲ減少
シ少口威力ヲ増進セシムルコトヲ得タリ(第一表參照)
少口徑銃ノ創意ニヤ列國一般ニ十一粒口徑ノ銃ヲハ耗若

臣
臣

其以下ノ口径ヲ減少シテ速率増加ヲ圖リ(七)口径ニ於テハ
 初達四百五十米突前後ナリカハ口径若シキ以下ノ口径ト
 考シタルカ爲ニ六百四十米前後ニ増進シ而シテ彈丸ノ重
 量ノ口径ノ減少ト爲ラニ輕減シタルニ横断面ノ單位ノ
 重量ハ却テ増加シタリ(高進シテ遂ニ口径五口径トナリ
 彈丸横断面單位ノ重量ヲ減スルコトナク初達七
 百米以上ニ増加シ以テ著シク威力ヲ増進セシムルニ
 至リ本邦現制式小銃ハ茲ノ理由ニヨリ制定セラル
 マルモノニシテ其ノ彈道性能ハ優秀ナル當時他ノ列國
 ニ採用シテタル軍用小銃ニ比シテ遜色ナキコトコトリス
 (第一番ヲニ番参照)
 八)口径ノ軍用小銃ヲ有スル獨佛兩國ノ如キモ口
 徑ヲ減少シテ彈道性能ヲ優秀ナラシムルノ利益

マサル、アラス、然レトモ、財政上ノ関係ハ速ニ之レカ改善ヲ
 実行スルニ難キカ如シ是ニ於テカ銃ノ制式改善以外
 於テ種々ナル研究ヲ重テ遂ニ一種ノ尖頭新彈ヲ
 創製シ獨國ニ在ラコトS彈(重量十九)佛國ニ在ラコ
 D彈(重量十二九八)ト名ケルヤ之ヲ制式トシテ獨
 國現用九十八年式銃若シ佛國現用ノルヤ此銃ノ採用
 云々至レリ(獨佛二國ノ外政未列國ニ於テモ此種彈也ノ同シ
 研究試験中ニアルコトハ諸雜誌ニ散見セリ)此新彈丸ハ
 其ノ横断面ノ中空ヲ考スルコトナク重量ヲ輕減シ先カノ
 尤カ故ニ断面單位ノ重量ハ著シク減少(此彈ノ断面
 單位ノ重量ハ二十四四)セラレタルトキ空氣ノ抵抗力ハ固
 彈丸形狀ノ改良ト連平ノ著大ニ増加(此彈ノ初速ハ百
 七十五米)トシテ其ノ不利ヲ補ヒテ而シテ此彈ノ彈道ハ

陸軍省
 軍械部

0501

著し、低伸ヲ來シ(千五百米以内、於テ本邦現制式銃彈ヨリ
 優秀ニシテ二千米ノ彈道ハ略相等シ)活力モ亦徒々増大
 シテトモ千米以上ニ在リテ八十八年式銃彈ノモノニ及ハサルハ
 横断面比ハ彈量過輕トナリテ結果ニ外ナク應急ノ
 為ニ制定シタル彈丸ニシテ臨カツ得ル所ナク(第三番參
 照)
 小銃彈、研究妙法ナルヲ以テ當審査部ニ於テ凡三年
 九月以來之レカ改良ヲ希企圖シ重量及形狀ノ關シ
 數種、彈丸ヲ試製既完シ現制式小銃ニ試用シ發射
 ノ實際ヲ重々不遂ニ彈頭部ノ形狀尖銳ニシテ重量凡
 (新面單位、重量凡二十七瓦)ニ較テ重量凡二瓦一五ナル新式
 銃彈、有利ナルヲ認メタリ矣、新式銃彈ノ彈道性能ハ
 現制式銃彈ニ比シ優秀ニシテ彈道著シク低伸シ六

百米ノ彈道ノ最高ハ一米三七〇センチニ米五〇〇（階号ノ高サ）
 ノ彈道高ヲ有ルル射距離ハ七百五十米ノ遠ニ達スルヲ得
 テ活力モ亦増大セリ（第一表及第四回及五回参照）
 又此ノ新式銃彈ヲ古彈ニ比較スルトキハ千米以内ノ於テ彈
 道ノ伸張相等シラ千米以上ノ於テ著シク優越スルノ結果
 ヲ呈シ而シテ活力ハ至リテハ即チ避色ニカ如キモ彈丸断面
 單位ノ於テ活力ハ八百米以内ノ於テ相約伸シ其ノ以上ノ距離
 ニ於テ其ノ著シク優越セリ従ツテ侵徹効力ハ現制式銃彈ニ
 比シ著シク増大シ十粒ノ軟銅板ヲ百米ノ距離ニ於テ五粒ノ
 軟銅板又ハ三粒ノ特別防楯銅板ヲ四百米ノ距離ニ於テ完
 易ニ貫通（古ノ彈ハ三百五十米ノ距離ニ於テ七粒ノ鉄板ヲ
 貫通スト云フ）スルヲ以テ戦術上ノ要材ニ欠クルトナシト確信
 ス（第一表及第二表参照）

陸

陸

若夫レ人馬ノ計ルニ殺傷効力ニ至リテハ骨部ノ創傷ノ現制
 可銃彈比シ輕易ナラス純軟部及臟器ノ創傷ハ稍輕キ
 力如キモ要スルニ致關ノ目的ヲ達シ得ルモノト確認セラレ
 タリ(別表動物ノ計ルニ効力比較表體腔成續書参照)而シテ
 銃ノ利活ノ單ニ創傷ソノモノニ對テ下シタルモノナレドモ軍用
 小銃ノ威力ハ創傷ノ輕重ノミニ依ルモノニアラスシテ之ニ因テ生
 シタル殺傷數ノ多寡ハ重キヲ置カサルヘカクサルヤ論ナシ
 而シテ其ノ動物体純軟部創傷ノ輕キニ願クヘキ状
 態ハ土銃口徑銃鉛彈ノ八粒口徑銃被套彈ニ改変
 シタルトキ既ニ認知セラレタルトコロナリ然レトモ然ノ小口径
 ノ故ヲ以テ連率ノ増加ヲ制限シ彈道底伸ヲ斷念
 スルノ理由アリト認ムルヲ得サルノミナラス連率ヲ増加シ
 彈道ヲ底伸セシメテ成ヘク多數ノ殺傷ヲ生セシムルヲ

戦場ノ勝利ヲ収メハキ戦術上ノ要件ヲ無視スルヲ得ル
レシ

又其ノ創傷ノ経過良好ナル間接ニ補充ノ人負ヲ得ル
ニ事シトノ不利ヲ唱ヘ得サルニアラスルヘシト雖トモ多ク教ノ
傷者ヲ生ズルニ因リ後方衛生勤務ニ混雜不整
ヲ来シ之カ高ニ傷者ノ手当ヲ急リ比較的輕易ノ
創傷モ重傷ニ陥ルヘキ場合少カラスルヲ知ラハ然ノ事
深ク論ズルニ足ラスルナリ

之ヲ要スルニ新式銃彈ノ倍々ノ點ヲ於テ現制式銃彈ニ
比シ威力頗ル優秀ニシテ制式ヲ改変シ之ヲ採用スルノ
價値アルモノナルコトヲ確認ス

佐
軍

0505

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

医
史

0506

三年式銃彈動物に対する効力比較試験成績報告書

陸馬生豚各於頭生犬骨於頭及内臓ヲ除去シタル
人屬考体ニ就テ施行シタル射撃試験成績ニ
係ルヤル新案左ノ如シ

一、尖彈ニ因ルニ單純軟部筋創ニ制式彈ニ因ルニ
比スレハ一般ニ輕ク其經過ヲ稍短キモ傷痕
大差ナシ

二、尖彈ニ因ルニ骨傷筋創ニ近射及遠射ニ於テ制式彈
ニ因ルニ比シ輕易ナリ

三、尖彈ニ因ルニ臟器筋創ニ制式彈ニ因ルニ比シ
輕キモ、如キモ其後傷痕ノ大差ナシ

之レヲ要スルニ尖彈ノ殺傷力ニ制式彈ノ殺傷力ニ比ス
レハ稍輕キモ殺傷ノ目的ヲ達シ得ルモト思フ

陸軍省
陸軍部

0507

明治四年七月六日

陸軍技術審査部印用掛

陸軍一等軍醫西田孝伸 芳原、深田

陸軍一等軍醫白 鶴田、中

陸軍二等軍醫白 中山、森彦

陸軍三等軍醫白 右田、模志中

陸軍三等軍醫白 新山、徳造

陸軍二等軍醫白 今井、廉

陸軍一等軍醫白 廣正、照

陸軍二等軍醫白 河田、秀男

0508

一四〇式航弾、三十年式航弾、照尺距離比較表

一三九式航弾、三十年式航弾、照尺距離比較表

一三八式航弾、三十年式航弾、射表

一三七式航弾、三十年式航弾、射表

一三六式航弾、三十年式航弾、射表

右表、軍用書

陸軍

0509